

歴史學の歴史性

——ロックフェラー財閥に關する種々の研究について——

小原敬士

- 一 一つでない歴史的真實
- 二 ヘンリー・ロイドとアイダ・ターベルの場合
- 三 ジョン・フリンの『神の金』
- 四 アラン・ネヴィンにおける二つのロックフェラー
- 五 大企業の歴史學

一

歴史學は歴史的真實を究明することを任務とする。しかし、一體ながら「歴史的真實」であるか。眞實は容易につかみ難い。歴史の出來事は過去の一回限りの出來事である。それは客觀的には唯一無二の眞實であるはずである。しかし、それは歴史敘述の對象となるやいなや必ずしもただひとつの姿をとってわれわれの前に現われる

歴史學の歴史性

とは限らない。歴史的認識は歴史學者の眼光のいかんによつて、また彼がその中に置かれている社會的状況のいかんによつて、決してひとつではないからである。歴史學は、たとえ、その研究對象が過去のものであつても、いやしくも社會的事象を對象とする限り、つねに社會的もしくは歴史的限制から免れることはできない。歴史學はそれ自身が歴史的存在である。

アメリカのジョン・ディー・ロックフェラー (John D. Rockefeller, 1839—1937) の生涯と、スタンダード石油會社を中心とするロックフェラー財閥の形成と發展の歴史は、アメリカ獨占資本主義發展史上きわめて重要な意義をもつ出來事であるが、同財閥に關する歴史敘述が、それぞれの學者により、またそれぞれの時代により

いちじるしく異っていることは、きわめて興味がある。
ジョン・ディー・ロックフェラーそのひとの風貌につ
いてさえも、それぞれの傳記學者の描寫はまちまちであ
る。

『ジョン・ディー』(John D. A Portrait in Oils,
1929)の著者ウィンクラー(John K. Winkler)は晩年
のロックフェラーの風貌についてこうかいてゐる。

「たしかに、このひとは、精神的にも肉體的にも自
然界の變種である。二十年ほど前には彼はミイラのよ
うであった。彼の皮膚は沙漠の柀のように色艶がな
かった。不思議な消化器の病氣がかすかな眉毛以外のす
べての毛髪を、睫毛までも拂い落してしまった。病氣
は非常に重く、一時ジョン・ディーは人間の乳で生命
をつなげねばならなかった。病氣は彼の毛髪と普通の
食事を奪いとったけれども、不思議なことに、彼の齒は
病氣の影響をうけなかった。彼は蟲齒は一本もない。
病氣は、いまは假髮でかくされているが、奇妙な隆起
があり、皮膚がひきしまった大きな頭の強さをあらわ
にした。ジョン・ディーは決して脊は高くなかった

が、その旺んな頃には牛のような頸と力強い肩をもつ
ていた。それでも頭と耳は不釣合なほど大きいように
みえた。眼は小さく、輝いていたが、奇妙に石のよう
であった。それは、あたかも内側から人爲的に照らさ
れているように冷い火で輝いていた。(すまも輝いて
ゐる。)

口髯のマスクがないと、ロックフェラーの口は、垂
れ下りがある細長い割れ目のような恰好であった。頬
一杯についている深い縦皺がそれを強めていた。頬は
重く豊かであった。鼻だけがはっきりして、小さ
く、細く、敏感であつて兩頬の間に刺のように高くな
つていた。マスクをとつた禿頭のロックフェラーは、
想像力の強い觀察者にとつては、『まさかりをもつた
インディアン』、『あんこうのように死んだもの』、『頭
巾をかぶっている』と、彼はスペインの畫廊でみかける
ような宗教裁判の老僧のようにみえる』といったよう
に映つた。」

『力の研究』(Study in Power John D. Rockefeller,
Industrialist and Philanthropist)の著者フラン・ネヴ

ィンス (Allan Nevins) は、四十歳のロックフェラーの風貌を次のように描いている。

「一八七八年に四十歳の誕生日を祝ったジョン・ディー・ロックフェラーは、脊丈が六フイートに近く、頭には茶褐色の毛髪がいっぱいあり、濃い赤毛の口髯をもった頑丈な体格の人であった。彼の青い眼は鋭かった。彼の身邊には威厳の空気が漂っていたが、しかし彼の舉措は静かで、ひとに親切であり、ただ彼をみるひとはときどき人を刺すような一瞥を感じて驚き、心が亂れるだけである。」

ウィングラーの記述は晩年のロックフェラーの風貌であり、ネヴィンスのものは四十歳のロックフェラーのそれであるが、それにしても両者はいちじるしく違っている。脊丈にしてもひとは「高くない」といい、他は「六フイートに近い」という。同じ人物の風貌だけについてもそのように違っている。ロックフェラーの社会的行動、殊にその事業であるスタンダード石油會社の活動とその社会的意義に至っては、いろいろな學者によって、驚くほど異った敘述が與えられているのである。

歴史學の歴史性

(1) John K. Winkler, *John D. A Portrait in Oils*, 1929, pp. 21—22.

(2) Allan Nevins, *Study in Power. John D. Rockefeller. Industrialist and Philanthropist*, vol. 1, 1953, p. 324—325. なおジョン・フリンは、二十五歳のロックフェラーについて、次のような記述を與えている。

「彼は背の高い、すらりとしてはいたが強健でハンサムなひとであり、圓味のある強い顎と大きな、しっかりした口をもっていた。彼はそのような若い男には稀な品格を身につけていた。」(John T. Flynn, *God's Gold. The Story of Rockefeller and His Times*, 1932, p. 114)

二

ロックフェラーの主事業であるスタンダード石油會社の石油業獨占を社會問題として最初にとり上げたヘンリー・ロイドの『公共の富に反する富』(Henry Darnest Lloyd, *Wealth Against Commonwealth*, 1894) においては、書名そのものが示すように、スタンダード石油によって代表される獨占資本を公共福祉に反するものとして、きびしく批判し、排撃する態度がとられている。

(註) ヘンリー・タイムズ・ロイド 1847. 5. 1, New York

City—1903. 9. 28) は、一八四七年五月一日、ダッチ・リ
 フォームド教會の牧師アーロン・ロイム (Aaron Lloyd)
 の子 (母親はクリスタイ・ロイム (Christie Lloyd) とし
 てニューヨークに生れ、一八六九年コロムビア大學の MA
 をとつた後、法曹界に入り、ニューヨーク裁判所の裁判長
 サイモン・チェイス (Simon P. Chase) の書記となつた
 (一八七一年)。彼は、初めから進歩的な立場に立ち、タマ
 ニー・ホールの肅清にも盡力し、リズナル・リン・ブリーカン
 によるグリーリーの大統領候補指名にも反対したが、間も
 なく政界に失望してジャーナリストとなり、シカゴ・トリ
 ビューンに入社して獨占反對の論陣を張つた。彼がジャー
 ナリストとして名聲を上げたのは、一八八一年、ウィリア
 ム・ハウエルズ (William Dean Howells) が編集長であ
 つた「アトランティック・インスリー」誌に「Story of a
 Great Monopoly」と題する長篇の論文をかかげたことに
 よつてであつた。ジョン・フリンはそれについてこうか
 いてゐる。「彼 (ロイム) の論文「The Story of a Great
 Monopoly」は、ロックフェラーの前進はその當時の基本
 的な經濟的宗教そのものに對する攻撃であることを公然と
 暴露したほとんど最初のものではあつた。それまでは、ロッ
 クフェラーならびにトラストに反對してあげられた叫びの
 大部分は、その直接の犠牲者たち—精油業者や販賣業者—
 からのものであつた。ここに、一人の不偏不黨のジャーナ
 リストおよび研究者からの警告があつた。彼は一八七六年

のロックフェラーのやり方に魅せられ、それ以來それにつ
 いてノットをひくつてゐたのである。」(John T. Flynn,
God's Gold, 1932, p. 253)「アトランティック・インス
 リ」のその號は、ロイムの論文のために七版を重ねたと
 われる。一八八五年、ロイムはシカゴ・トリビューンを辭
 してイギリスに渡り、その國の政治問題を研究して歸國し、
 一八八六年にはヘイマーケット事件の被告の救援運動に活
 動した。一八九〇年には「*A Strike of Millionaires Against
 Miners*, 1890. を著わし、一八九四年には主著「*Wealth Against
 Commonwealth*, 1894. を出版した。その間、彼は「ル
 ウォーキー市街電車従業員組合の組織に盡力し、ブレイク
 争議の指導者エーレン・デニス (Eugene Victor Debs)
 を援助した。一八九四年には、全國人民黨 (National Peo-
 ple's Party) から國會議員候補の指名をうけたが、選挙に
 は敗北した。一八九七年及び一九〇〇年には再度の外遊を
 試みた。著作としては、前掲のもの以外に、「*Labour Copar-
 tnership*, 1898. *Newest England*, 1900. *A Country Without
 Strikes*, 1900. *Man, the Social Creator*, 1906. *A Sovereign
 People*, 1907. *Men, the Workers*, 1909. などがある。」(C. Ll-
 oyd, *Henry Damarest Lloyd*, 2 vols., 1903. 参照)。

ロイドの『公共の富に反する富』は、スタンダード石
 油の外、牛肉罐詰業、ウイスキー蒸溜業、石炭業などの
 獨占をとり扱っているが、その場合の彼の敘述は獨占資

本の専横に對する強烈な憤怒によって貫かれている。ジョン・フリンはこの書物についてこうかいてゐる。

「それは、ロックフェラーの巨大な獨占の發端からの全徑路に關する生き生きとした、劇的な、きわめて多彩な、しかも十分に忠實で權威のある記述を含んでゐる。それは全く、そのときまでのスタンダード石油の最初の一貫した歴史であつた。そこには、南部開發會社の話、しっかりした取引協定をつくるためのロックフェラーの數々の工作、リベイトその他各種の不正な差別契約を通じてのロックフェラーの獨占の最後の完成などが描き出された。この書物は、非難において假借がなかつた。それは、ロックフェラーの全徑路が、不動のものとロイドが考へた個人主義體制に加へた攻撃に對する烈火のような憤怒の情を表わした。」

この書物の中にはスタンダード石油の不正取引を示すような多數の事實が示されているが、次に示すようなバックス夫人 (Mrs. Backus) 事件もその一つである。バックス夫人といふのは、クリーヴランドの精油業者バカス (F. M. Backus) の未亡人である。ロイドは氏名を

明記してはいないが、彼女の事業がロックフェラーによつて不當な價格で買収されたいきさつを詳細に物語つてゐる。

それによると、バックス夫人は一八七四年夫が死んだ後、四年間に互り獨力で潤滑油の精製事業を經營し、年二五、〇〇〇ドル以上の利潤をえていたところがスタンダード石油が一八七七年潤滑油の製造を開始した以後は、バックス夫人は事業の繼續が望みがないことを悟るようになり、會社を賣却することを希望した。彼女は「父なき子供の母親」として公正に取引することをロックフェラーに頼んだ。「彼は眼に涙を浮べて私の味方にならうと約束した。」そして「彼が要求することは彼女の會社の株式の支配權をうることに過ぎない」と付け加へた。彼女は「株式の價值よりはるかに低い」二〇萬ドルを要求したが、スタンダードは七九、〇〇〇ドルを提案した。彼女はその價格で事業を賣つた。バックス夫人は一五、〇〇〇ドルの株式を保有することを要求したが、その回答は無慈悲なノーであつた。彼女は次のような契約書に署名しなければならなかつた。

「私はキャホーガ・カウンティ」、オハイオ州その他いかなる場所においても、直接的にも間接的にも、單獨でも、他の何人との共同においても、もしくは他の會社の株主としてでも、石油もしくははその生産物の精製、製造、加工、パイプ輸送もしくは賣買の事業もしくはは取引に、従事もしくはは關係せず、もしやば事情を知って資本もしくはは貨幣をそれに用いることを許さざるものとする。」

バックス夫人はこの契約書に署名するのに「躊躇して」こういった。「まるで死刑の宣告書に署名しているみたいです。これは私の死刑宣告になると思います。」

このような事實を記述した後ロイドは次のような言葉で「あなたは精製してはいけない」と題するこの章を結んでいる。

「この出來事は永い間、埃にまみれてキャホーガ・カウンティの訴願裁判所の記録室に埋まっていたが、いまやひき出されて、市場哲學の教授たちが生産費や適者生存についての輝かしい一般性によって覆ってしまふものの真相が何であるかを人々に示すのであ

る。」

一九〇四年に出版されたアイダ・ターベルの『スタンダード石油會社の歴史』(Ida M. Tarbell, *The History of the Standard Oil Company*, 2 Vols., 1904) のスタンダード石油會社の獨占形成の記述として一つの權威であるが、これもまたロイドの場合に劣らず、獨占資本の支配に對する非難と抗議によって裏付けられている。

(註) アイダ・ターベル (Ida Miner Tarbell, 1857—1944) はペンシルヴェニア州エリー・カウンティの石油地帯に生れ、子供のときから石油探掘業者と精油業者との絶えざる闘争を見聞していた。彼女の家族も石油業に従事しており、その兄は、最後までスタンダード石油に對抗していたピユア・オイル會社に勤めていた。ターベルは一八八三年オールドゲニー・カレッジにおいてMAをとり、さらにパリのソルボンヌ大學において歴史學を修め、歸國後「マククリア雑誌」(*McClure's Magazine*)に「Life of Lincoln」(*Life of Abraham Lincoln*, 3 vols., 1900) を連載して好評を傳した。そこで編集者マククリア (S. S. McClure) はさらにターベルに委嘱して、時の問題となっていたスタンダード石油會社の歴史をかかせることにした。ターベルはパリ留學當時からロイドの著書によってスタンダード石油への興味をもつようになっていたために、

マクルーアの徳意によって直ちに資料の蒐集を始め、そのためロックフェラーの協力者であるヘンリー・ロジャース (Henry H. Rogers) をニューヨーク、ブロードウェイ二十六番の事務所を訪ねた。彼女はロジャースを少くとも二十回訪問したが、ロジャースの率直でフランクな人柄には非常に好感をもったといわれる。あるときターベルがテイストヴイルにおけるスタンダード石油の特に悪徳的な行動について語ると、ロジャースは重々しく頭を振って、「ごぞんじのように、あれは私たちのやった一番悪いことでした」と言った。また、ロジャースが「これを止める方法はありませんかね」と言ったのに對し、ターベルが「ありません。この話の公表を止めさせる方法はこの世の中には何もありません。」と答えたとき、ロジャースはそれ以上何もいわなかったと伝えられる。ターベルの論文は一九〇二年から雑誌に載り始め、二年間連載された。それは一八七二年から一八九八年に至るまでの間のスタンダード石油會社の罪惡の記録であり、歴史的敘述と非難との混合物であったが、その反響はすばしかなかった。それはセオドア・ローズヴェルト大統領による獨占禁止政策の強化の一つの動機となつたとさえいわれる。その後ターベルはエルバート・ゲイリー (Elbert H. Gary) の傳記 (一九二五年) や、オウエン・ヤング (Owen D. Young) の傳記 (一九三三年) などをかき、一九三六年には最後の學問的著作である *The Nationalizing of Business, 1878—1898, 1936* をかいた。その

歴史學の歴史性

外、自傳 *All in the Day's Work, 1939* がある。

例えば、ロイドも扱っているバッカス夫人の精油事業の買収については、ターベルは次のようにかいている。ロックフェラーは、自分の工場が實質價值以下の價格でとり上げられてしまったというバッカス夫人の抗議に對し、訴願裁判所における口述書の中で、

「私が文字と精神の中にとどめておかなかったような約束をしたということは眞實ではありません。また、彼女が眞の價值以下で財産を賣ることを餘儀なくされたということも眞實ではありません。私は斷言する。彼女は賣ることを餘儀なくされたのではない。それは彼女の側の自發的なものであり、その類はその價值よりはるかに以上でありました。彼女から買った建物は二〇、〇〇〇ドル以下の額で置換することができました。」

といっているが、ターベルはそれについて次のようにいふのである。——ロックフェラーがいうように、B夫人 (バッカス夫人) の工場は二〇、〇〇〇ドルで置換しうることはおそらく事實であろう。しかし、工場は彼女の

資産の小さな部分にすぎない。彼女はわが國における最も古い潤滑油精油工場の一つをもっていた。それは仕事が良いこと、取引が公正であることで好評をえており、三萬ドル乃至四萬ドルの年純収入を生むだけの商賣があった。ロックフェラーが七九、〇〇〇ドルを支拂ったのは、このような収入に對してである。この収入は、少からぬ蒸溜器やタンクや攪拌器をもつB石油會社の古き、名譽ある社名と結びついている。

ロックフェラーが斷言するように、B夫人が賣ることを餘儀なくされたわけではないことは疑いもなく眞實である。しかし、このような吸収合併の時期に賣ることを拒否したものの運命は彼女の眼の前にあった。彼女は一八七二年にクリーヴランドの二〇の精油工場がロックフェラーの手中に落ちたことをみていた。彼女はあらゆる精油中心地における獨立業者が次々に没落するのを目撃していた。彼女は個人事業を保持しようとするあらゆる努力が挫折するのを見た。彼女はよくても悪くても、賣却を拒否することはロックフェラーとの闘いを意味するものであり、闘いは結局敗北を意味することを信ずる

ようになった。そして彼女は破滅を避けるためにその事業をあきらめたのである。

ターベルは、一八七〇年代におけるロックフェラーによる精油業の吸収合併について、「このような吸収合併の仕事が着々と執念深く進行するにつれて、スタンダード石油會社と協力しているとみられる勢力から發する賃貸もしくは賣渡の申込に對する抵抗についての迷信的な恐怖がほとんど打ち勝ち難いほど大きくなった」とかいているが、彼女のみるところによると、バックカス夫人の工場はまさに最も可憐な犠牲の小羊と考えられたのである。

ヘンリー・ロイドやアイダ・ターベルがスタンダード石油の獨占資本を眞正面から攻撃したそのような書物をかいた時代は、アメリカの近代資本主義がその最も素朴な形態で自由奔放にその羽根を伸した時期であった。しかし、それはまた同時に資本主義の諸矛盾が最も露骨に表面に現われた時代であった。一方における鐵道、石油、砂糖、ウイスキーなどの諸産業での巨大な資本の集積と集中、資本家階級の巨額の致富と「街示的消費」と、他

方における無産労働者階級の形成と、その「絶對的」貧困化—そのような社會的對照がこの時代において最も明瞭に現われていた。しかも、八時間労働制その他の労働者保護政策は一般的に採用されていなかったし、社會改良主義も現實的には未だ日程に上っていなかった。獨占資本家と労働者、農民との經濟的矛盾と對立はきわめて生ままししい姿をとっていた。一八八五年のミズーリ鐵道の争議、一八八六年のヘイマーケット事件、一八九四年のブルマン争議などは、そのような對立の表面化であつた。⁽⁴⁾

ロイドやターベルの著作はそのような社會的經濟的情勢を背景としてかかれたものであつた。獨占資本は、それ自身の中からその現實的「平衡勢力」(countervailing power; J. K. Galbraith)としての労働組合を發生せしめると同時に、その觀念的平衡勢力として、ロイドやターベルを生み出したのである。

- (1) John T. Flynn, *God's Gold. The Story of Rockefeller and His Times*, 1932, p. 328.
 (2) Henry D. Lloyd, *Wealth Against Commonwealth*, 1894, p. 80.
 (3) Henry D. Lloyd, *ibid.*, p. 83.

歴史學の歴史性

- (4) Ida M. Tarbell, *The History of the Standard Oil Company*, Vol. 1, 1904, p. 206.
 (5) Ida M. Tarbell, *ibid.*, p. 207.
 (6) フラン・ネヴィンズもロイドの書物が反響をよんだ社會的背景についてこうかいている。「その書物は時期がよかつた。それは、ブルマン争議においてクリーヴランドが軍隊を用いたことが數百万の人々の胸に、大會社に對する苦い反感と、掠奪的な富が政府を反對者よりもむしろ同盟者とみとめていたという、いまましい確信とを植えつけた直後に出版された。國中に貧困と不滿がみちていた。」(Allan Nevins, *John D. Rockefeller. The Heroic Age of American Enterprise*, Vol. 2, 1940, p. 333.)

三

一九三二年に出版されたジョン・フリンの『神の金』(John T. Flynn, *God's Gold. The Story of Rockefeller and His Times*, 1932.)もロックフェラーとその事業に關するロイドやターベルの著作に劣らぬすぐれた研究であるが、彼の場合においては、ロックフェラーに對する評論の態度ははるかに公正であり、かなり好意的にさへあつた。それは、「序文」における次のような言葉に⁽¹⁾

よつても判る。

「この仕事を正當化するに當つて、ロックフェラー氏の傳記はまだ現われていないということを指摘することは無駄ではあるまい。一八七二年乃至一八九八年の間のスタンダード石油會社の諸事件に關するアイダ・ターベル嬢の輝かしい記述は、ヘンリー・ダマレスト・ロイドのさらに以前の著作と同じく傳記ではなかつた。それらは攻撃であつた。それらは、わが國の産業史における最も重要な文獻の中に位する價値があるけれども、それらのものは傳記とはいつていなかつた。筆者が四年ほど前にこの著作の仕事を始め、以來、ロックフェラー氏について二つの書物が現われた。その一つは短いジャーナリスティックな素描であり、もう一つは、主として彼の慈善事業に對するまとまりのない首尾一貫しない攻撃であつた。新聞や雜誌に、そのひとに關する無数の論文が現われたが、その大部分は、當時の出來事によつて觸發された亂暴な攻撃であり、そのあるもの、殊に近頃のもの、ばかばかしい頌辭である。この傑出した人物の生涯の全記録を公

平に検討し、彼の性格とその時代の事業とを物語る努力は誰もやらなかつた。

評傳自身についていえば、私はたった一つの取柄を主張できる。それは、私は問題の性質を、憎悪や愛情がそれに與えた様相から切り離し、彼とその時代の眞實の描圖をつくることを正直に試みたということである。」

フリンは、最初、議會や裁判所の記録とか新聞などから材料を集めて下原稿をつくり、さらにはつきりしない點を四十二點ロックフェラー家の代表者のアイヴィー・リー (Ivy Lee) に尋ねたとつてゐる。また彼は、原稿を、十年に互つてロックフェラー傳記の材料を集めてゐるウイリアム・イングリス (William O. Inglis) にみてもらい、彼から一八〇個所について訂正の指示を受け、そのうち六十四個所について加筆訂正を行ったといつてゐる。

このようなやり方で書かれたフリンの書物はいろいろな點で、ロイドもしくはターベルの記述とはちがつてゐる。例えば、例のバックカス夫人事件がそうである。

バックカス夫人事件においてロックフェラーが非難をうけた主な理由は、彼がバックカス夫人の工場をその實質價値の三分の一で買収し、憐れな犠牲者を大きな獨占力によって屈服せしめたということであったが、フリンの見解によると、バックカス夫人の自己の工場資産に對する二〇萬ドルの評價を支持する證據は「一點もない」と考えられる。夫人は事業がなお繁榮していた二年前に、「それよりかなり少い額で」工場をローズ氏に賣りたがっていた。ロックフェラーは全工場を二萬ドルで建て直すことができる⁽²⁾と宣言した。アイダ・ターベルは、工場の物理的再建は買収價格の三分の一でなしうるかもしれないが、年二五、〇〇〇ドル乃至三五、〇〇〇ドルの収益を生む事業の暖簾はどうなるかという疑問を提出しているが、破滅に類している事業の暖簾とは何であるうか。バックカス夫人の顧問辯護士チャールズ・マール (Charles H. Mart) の證言によると、夫人はスタンダード石油に對し、その資産の項目別の評價額を示したが、それは二〇萬ドルではなくて一五萬ドルであった。そのうち「工場、暖簾及び權利金」は七一、〇〇〇ドルと評價された。

その残りは石油手持分、現金、未拂配當金、受取手形などであった。ロックフェラーがバックカス夫人から譲り受けたのは、工場、暖簾及び石油であったが、前の二つのものについては、バックカス夫人の評價は七一、〇〇〇ドルであった。これに對してスタンダード石油は六萬ドルを提供し、石油は一九、〇〇〇ドルで別個に取引した。したがって、バックカス夫人が要求した額と、ロックフェラーが支拂った額との差額は、七一、〇〇〇ドルと六〇、〇〇〇ドルとの違いであって、それほど大きな格差ではない。フリンはまたこのように書いている。⁽²⁾——バックカス夫人はロックフェラーに工場を賣却することを強制されたようにいっているけれども、彼女は二年間に互って買手を探していた。「全く、あらゆる證據は彼女が語る話の逆である。彼女の義兄がいうように『その話を一日に三度も話して子供たちを養っている憐れな女の繰言』の外には、それを支持するものは一筋もない。それでも、この話はロックフェラーの名聲を傷けるために、非常に効果的に利用されている。」

バックカス夫人の工場の吸収合併に關する出來事のこの

よくな記述は、ロイドやターベルの記述とはいちじるしく異っていることが判る。それは、ジョン・フリソのひとの歴史的認識の反映であるとともに、その當時のアメリカ社會のロックフェラーに對する評價の反映でもあったのである。

しかし、フリソはロックフェラーの辯護だけにとどまっていたわけではない。できるだけ客觀的事實に忠實であらうとしたフリソは、ある場合には、ロックフェラー財閥の非行と罪惡の事實を詳細に記述して憚らなかつた。「ラッドロウの虐殺」(The Ludlow Massacre)と題する章などがそれである。

そこに記述されているのは、一九一三年八月、ロックフェラー傘下のコロラド燃料鐵礦會社 (Colorado Fuel and Iron Company) に起つた労働者彈壓事件である。ことのいきさつは次の通りであつた。一九一三年の八月、コロラド燃料鐵礦會社の労働者たちは、合同鐵山労働者組合 (United Mine Workers) のオルガナイザー、フランシス・ヘイス (Frank Hayes) を通じて、會社に對し労働條件改善の要求を行つた。その要求は、労働組合

の公認、トン當り手當の一〇パーセントの引上、八時間労働制、自由に醫者を選び、どの店でも買物をし、どこにでも宿所を定める權利など、いまからみれば最低の要求であつた。これに對して會社はなんらの回答をも與えなかつた。そこで労働者たちは九月十五日、デンヴァーにおいて集會を開き、同月二十三日、同盟罷業を行つた。労働者たちは、鐵山の職場を離れたばかりでなく、その家を離れ、家族ぐるみ山の中のラッドロウとよばれたところへ移つてテント村を建てた、というのは、その鐵山の町は道路も家屋も、商店も教會もすべて會社の財産であつたからである。十月にはいと、しばしば爭議團と會社側の暴力團との間に衝突が起り、遂には州の軍隊が出勤した。そのために一應秩序が回復したが、それは永續的なものではなかつた。一九一四年にはいと、鬭争はもう一度激化した。殊に四月二十日には、州兵と爭議團との間に激しい鬭争が起り、労働者の指導者であつたジョン・タイカス (John Tikas) は、州兵の統率者リンダーフェルト (K. E. Linderfeldt) によつて逮捕されて撲殺された。そればかりでなく、爭議團の人々は

その翌朝、テント村の下の洞窟の中に、二人の婦人と一人の子供の黒焦げの死體を發見した。この「ラッドロウの虐殺」のニュースが傳わると、忽ち鑛山地方一帯の勞働者の間に暴動が起つた。彼等はエムバイヤ鑛山に火を放ち、三人の看視人を殺した。四月二十九日には、彼等はフォーブス鑛山に放火し、九人の會社使用人を殺した。この暴動は連邦軍隊の出動によってやっと鎮壓されたが、その結果、争議指導者ジョン・ルカス (John Lucas) を始め、一六三人の鑛山勞働者が逮捕されて殺人罪に問われた。

これが、いわゆる「ラッドロウの虐殺」の纏末であるが、それは歳老いたロックフェラーをもう一度きびしい世論の批判の前に立たしめた。そしてジョン・フリンもまた、コロラド會社の直接の責任者であるフレデリック・ゲイツ (Frederick T. Gates) 及びロックフェラー二世並びにジョン・ディーなどのロックフェラー一家がある程度まで、この事件に責任があることを認めているのである。彼は⁽⁴⁾いう。

「ストライキがきわめて激しく勃發した後の行動に

ついて、ロックフェラー一家を罪なしとすることはそれほど容易ではない。」

「この二人のもの(ロックフェラー二世とゲイツ)を辯護して言いうることをすべて言うとしても、しかもなお彼等が免れえないある責任の重さが残るのである。」

以上によってほぼ明らかであるように、ジョン・フリンはロックフェラーに對し、ロイドやターベルほど苛酷ではなかったが、しかし、後に述べるアラン・ネヴィンスほどには寛大ではなかった。フリンのそのような評價はやはり、その時代の獨占資本に對する社會的評價を反映するものであった。彼がロックフェラー評傳をかけた二十世紀の二〇—三〇年代は、一面においてアメリカ資本主義の「相對的安定期」であり、「強靱な個人主義」(rugged individualism)の哲學が支配し、その原理の上に自動車、建築、電氣機具、化學工業などの獨占産業がめざましく發展し、繁榮した時期であった。しかし、その時期には十九世紀末以來の反獨占論が人々の意識の中にまだまだ強く生き残っていた。『有階級論』(一八

九九年)や『營利企業論』(一九〇四年)などによって、資本家の營利活動とその「術的富」の蓄積を批判したツースタイン・ヴェンレン(Thorstein B. Veblen)は、二十世紀の二十年代には、『不在所有者制』(一九二三年)や『技術者と價格體制』(一九二一年)を著わして、獨占資本家の「怠業」を攻撃し、生産的技術者を基軸とする奉仕性(serviceability)の高揚を主張していた。現實の政策としても、政府の獨占禁止政策は一九一一年頃から次第に緩和される傾向をもっているが、それでもシャーマン獨占禁止法はそのまま存続しており、政府は同法違反者ができるだけ公正に告發する方針をとっていた。

そのようなアメリカ社會の一般的情勢こそはフリンの書物の背景であり、地盤であったのである。

- (1) John T. Flynn, *God's Gold. The Story of Rockefeller and His Times*, 1932, VIII—IX.
- (2) John T. Flynn, *ibid.*, pp. 203—4.
- (3) John T. Flynn, *ibid.*, pp. 453 ff.
- (4) John T. Flynn, *ibid.*, pp. 457—8.

四

ジョン・フリンの書物がかかれてから八年後の一九四〇年にコロムビア大學のアラン・ネヴィンス(Allen Nevins)教授が二卷の『ジョン・ディー・ロックフェラー・アメリカ企業の英雄時代』(John D. Rockefeller, *The Heroic Age of American Enterprise*, 2 vols.)をかいた。彼はさらに一九五三年に、前著の改訂版である『力の研究、産業資本家、慈善事業家ジョン・ディー・ロックフェラー』二卷(*Study in Power. John D. Rockefeller. Industrialist and Philanthropist*, 2 vols.)を著わした。これらの書物ではロックフェラーはさらに別の姿をもって現われてくる。ネヴィンスのロックフェラーはそれ以前の傳記學者のロックフェラーとちがっているばかりでない。ネヴィンス自身の描いた畫像も、一九四〇年と一九五三年とはかなり異っているのである。バックス夫人の工場を買収問題については、ネヴィンスはフリンの場合よりもさらに一層決定的に、ロックフェラーに有利な解釋を下している。ロックフェラーは三〇萬ドルの價値があるバックス工場をわずか七萬九、〇〇〇ドルの安値で手に入れたといわれているけれども、

バックカス夫人自身の最初の評價は二〇萬ドルではなくて一五萬ドルであった。その一五萬ドルの中で「工場、のれん、権利」の評價額が七萬一、〇〇〇ドルであった。これに對してスタンダードは六萬ドルを支拂った。またスタンダードは石油在庫品を一萬九、〇〇〇ドルで買い、現金、受取手形、未拂配當金など六萬ドルの價値のある資産をバックカス夫人の手許に残した。つまり、バックカス夫人は一五萬ドルと評價した資産に對して一三萬九、〇〇〇ドルをうけとつたのであって、その差は一萬一、〇〇〇ドルにすぎない。バックカス夫人はその工場が年に三萬乃至四萬ドルの利潤をあげていたといっているが、「これは他の證據と矛盾する。」ロックフェラーはその工場を二萬ドルで再建することができるといい、ターベルもそれに同意した。古ぼけた二萬ドルの工場が年に三萬ドルの収益をあげるといふことは信じ難い。それで一三萬九、〇〇〇ドルをえたのは、うまくいった方である。——ネヴィンスはそのように言う。そして彼は、ロックフェラーがイングリス (Ingriss) に語つた次のような言葉を引用して、買収はむしろロックフェラーの温情ある行爲で

あつたといふのである。

「特にこの場合には私は昔の雇人であるフレッド・バックカスに對する思いやりで動いた。彼は自分の事務所の帳簿係で永い間肺病であつた。彼は子供の頃、私と一緒に日曜學校の教師だつた。」

このような解釋をするネヴィンスにとって、ヘンリー・ロイドやマイダ・ターベルの見方が同意できないのは當然である。彼はロイドの見解やその書物について次のようなきびしい批判を加えている。

バックカス工場問題については、ネヴィンスは一九四〇年の書物の中で、このようにいふ。「ロイドは、バックカス未亡人が自分の『破滅』について語つた悪意にみちた話を全部うのみにした。彼は、われわれがその話をうち破るのにつかつた材料をすべて入手していたし、もしくは獲得できたはずなのだ。」

ロイドの『公共の富に反する富』については、ネヴィンスは一九四〇年の書物ではこうかいてゐる。

「時世に對する一つの論戰としてはそれはすばらしいものであつた。後世のものの研究のための産業史の

一節としては、それはほとんど全く無價值であつた。」
 「しかし、企業史や經濟原理についての今日の知識に照らしてこの書物を批判的に吟味してみると、それは偏見と歪曲と誤まつた解釋に充ちてゐることがわかる。」

一九五三年の著書においてはネヴィンスの批判はさらに一層手きびしく。

『大獨占物語』(The Story of a Great Monopoly) という論文の十三年後の一八九四年に出版されたこの書物『公共の富に反する富』は浩翰な新資料にもとづいていたが、前著と同じような歪曲とまぎれもない誤謬とを示していた。企業史の一章(本書はそうであることを目指しているのだが)としては、それは滑稽である。ロックフェラーについての傳記的データへの貢獻としては、それは、一番よい點でもひとを誤るものであり、悪い點では悪意にみちた虚偽である。その意義は、ロックフェラーの歪められた原型を人々の心裡に植えつけるのに役立つことである。⁽⁴⁾

ネヴィンスは、「ロイドの書物の中で最もひどくロック

フェラーを傷けた部分は、次の三つの個所であつて、それらは、非難や諷刺によつて、犯罪的な性格の人格的無慈悲さを彼に負わせているのである。⁽⁵⁾と云い、その「三つの個所」として、バックス工場事件の外、ヴァキューム石油(ロッチェスターにおけるスタンダードの子會社)が競争工場を爆破させようとした計畫にロックフェラーが關係していたとかいてゐる個所と、一八八四年、ヘンリー・ペイン(Henry B. Payne)をスタンダード・ラストの代辯者として上院に選出するために、ロックフェラーがオハイオ議會に贈賄したと記してゐる部分とをあげてゐる。

アイダ・ターベルの『スタンダード石油會社史』についてもネヴィンスはもちろん批判的である。しかし、この場合でも、一九五三年の方が一九四〇年よりも一層辛辣である。

一九四〇年にはネヴィンスはこうかいてゐる。⁽⁶⁾

「全く、全體としてみれば、また次のような二つの事實、すなわち、第一にターベル女史は決して不偏不黨を標榜せず、石油地帯の利益代表としてかいたとい

う事實、第二に、彼女は證據とは何かということについて間違つた觀念をもつていたという事實を適當に割引して考えるならば、この書物は賞讃をうけただけの値打がある。それはたしかにアメリカが生み出した企業史の最もすぐれた一章であつた。それは龐大なデータを集め、それを明晰に配列し、そしてスタンダードの歴史を、その後のほとんどあらゆる著者がそれに従つたような型にはめ込んだ。今日の批判的な讀者はそれを貫いて流れている偏見を探し出すだろう。同時にその結論は重要な點で明らかに誤まっている。……彼女はバッカス未亡人の途方もない非難を新しく流布させた。彼女はヴァキューム石油事件に關してロイドとほぼ同じような一面的な記述を行い、トラストの指導者たちが、『無法の冷酷な行爲』をほんとに犯したことを暗示した。しかし、それにもかかわらず、スタンダードのやり方に關する彼女の告發の大部分は絶対に反駁しがたきものであつた。そのみでなく、彼女の著書はある點では事實あまりに穩かすぎた。というのは、彼女はトラストの過大な價格や收益について、當

歴史學の歴史性

然なしうること以下のことをやったからである。」ところが、ネヴィンスは、一九五三年の書物ではかなりちがった言い方をしている。

「しかし、ターベル女史はロイドと同じように、ある種の個人攻撃においてロックフェラーに最大の名譽毀損を行った。彼女はバッカス未亡人の途方もない非難を新しく流布させた。彼女はヴァキューム石油事件に關してロイドとほぼ同じような一面的な記述を行い、スタンダード指導者たちが無罪であることを認めるほど十分に公平ではあつたけれども、彼らがほんとに『無法であり冷酷』であつたことを暗示した。そして一九〇五年にはターベル女史は、マクルーア雜誌に、全く彼女らしくもない二つの論文を發表した。彼女は當時西部に住んでいたロックフェラーの父親を假借なく攻撃した。彼女は石油王の偽證を暴露した。……」

しかしながら、一九四〇年と一九五三年とで最もいぢるしく異なるのは、前述の「ラッドロウ虐殺」に關する記述である。

一九四〇年の『ジョン・ディー・ロックフェラー』では、ネヴィンスは「彼〔ロックフェラー〕の生涯の中にかき込まるべきひとつの暗い、そして論争の多いページが残っている」という書き出しで、ラッドロウ事件について二一ページに亘る詳細な記述を試みている。そこには、一九一四年四月二一日、全國民は、その前日に、コロラド州ラッドロウにおいて炭坑夫の争議團と軍隊との間に衝突が起つたことを知ってショックをうけたこと、労働者たちは六人の死者を出して敗北したこと、防衛隊が争議團の家族を收容していたテントに發砲したとき、その下の穴にかくれていた二人の婦人と十一人の子供が窒息したことがあるのままにかかれてゐる。そこには、「世論は直ちに労働者の味方であることを強く表明した」とか「アメリカの公衆はまた、きわめて當然のことであるが、事件發生の主な責任を二人のロックフェラー〔第一世及び第二世〕に負わせた」とか、「われわれはロックフェラーを全面的に辯護するわけにはゆかない」と等々のかなり批判的な表現が用いられている。

ところが、一九五三年の書物においては、ラッドロウ

事件は、ロックフェラー財團の活動に関連して、わずかに十數行に亘り、ごく簡潔に敘述されているにすぎない。しかもネヴィンスの態度はジョン・ディー・ロックフェラーに對していちじるしく同情的であり、辯護的である。彼はこうかいてゐる。

「一九一四年には、ロックフェラーとその息子はコロラド燃料鐵礦會社の労働争議にまき込まれた。この會社はあまり儲からぬ會社で、ロックフェラーたちはその四〇パーセントの權利をもっていた。當時七十五歳であつたロックフェラーはこの會社になんら積極的な關係をもつていなかったのであるから、この事件は彼の息子の傳記に屬する。」

ネヴィンは、『力の研究』の序文において彼自身を「眞理探求者」(truth-seeker)として主張している。彼の見解によると、従來のアメリカの企業史は二つの重大なハンディキャップによつて悩まされていた。その一つは、企業が偏見や歪曲の犠牲となることをおそれて、その記録を研究者に公開することを躊躇したことであり、もう一つは、そのような記録に基く著作は企業活動の無批判

的な見方に陥り易いと一般に考えられたことである。このようなハンディキャップが克服されない限り、アメリカ史のきわめて重要な部分はいつまでも未開拓の状態に止まらざるをえない。しかし、「この二つの相對立する型の不信は、虚心的研究者や解釋者によってだんだんと驅逐されるだろう。眞理探究者からは、企業は間違つた表現をうけることをおそれる必要はないし、批判的な大衆は欺かれることを憂うる必要はない。」¹⁰ネヴィンスはそのようにいう。

しかしながら、ネヴィンスが企業と批判的大衆とのいづれの側により多く立っているかは、同じ序文における次の言葉¹¹をよめばおのずから明らかである。

「南北戦争から第一次世界大戦までの商工業の記録をみるものは誰でも、經濟が最も根本的な變化をうけたことを看取する。弱小できわめて競争的な單位の經濟界は、集中、能率及び高度の組織力の世界に席を譲つた。このような轉換は破壊と再建の永い過程を伴つた。大企業集合體は無数の小企業の挫折、破滅もしくは吸収なしにはうち立てられない。この轉換の只中に

歴史學の歴史性

捉えられた多くのものにとっては、その破壊的搾取的な面が際立ってみえた。その過程の指導者たちは、「盜賊王」のようにみえ、その過程自體は「豚の丸焼きの大宴会」のようにみえた。これは眞理の一面ではあるが、しかし他の面もある。長い眼でみれば、轉換の建設的な様相が破壊の様相よりも一層重要であつた。新しい富の發展が既存の富の浪費よりもはるかに重さがあつた。この過程の不可避性、あらゆる激變の苦痛、そして窮局の建設的收獲の重要性に適當な注意を拂わねばならない。」

彼はまた「時代の経過が彼「ロックフェラー」の經歷に對してある種の新しい展望を與えた、」ともかいてゐる。

かつてアイダ・ターベルは、スタンダード石油會社の歴史をかいた後に、「別の側についていふべきことが若干あつた。いつでもそれがある。假りに私が百年後にかいとすれば、全體のことを違つてみたかもしれない、¹²」といつたが、ネヴィンスはターベルから約五〇年後に、彼女とは全く別の見方をしたのである。そして、ターベルの

著作がその當時の社會情勢を背景として成り立っていたのと同じように、ネヴィンズのロッキングヘラーに對する態度、殊に一九五三年のそれが、第二次世界大戦以後、ますます強固に制度的な確立をとげた獨占資本の支配體制の學問的な反映であることはきわめて明瞭である。

- (1) Allan Nevins, *John D. Rockefeller*, 1940, Vol. II, p. 48 ff.
- (2) Allan Nevins, *ibid.*, p. 50.
- (3) Allan Nevins *ibid.*, p. 336.
- (4) Allan Nevins, *ibid.*, p. 334.
- (5) Allan Nevins, *Study in Power*, 1953, Vol. II, p. 330.
- (6) Allan Nevins, *ibid.*, p. 332.
- (7) Allan Nevins, *John D. Rockefeller*, 1940, Vol. II, p. 524.
- (8) Allan Nevins, *Study in Power*, 1953, Vol. II, p. 343.
- (9) Allan Nevins, *John D. Rockefeller*, 1940, Vol. II, p. 666.
- (10) Allan Nevins, *Study in Power*, 1953, Vol. II, p. 391.
- (11) Allan Nevins, *ibid.*, VII—VIII.
- (12) Allan Nevins, *ibid.*, VIII.
- (13) Public Opinion, May 27, 1905 (Allan Nevins, *John D. Rockefeller*, 1940 Vol. II, p. 524. N.)

五

しかしながら、それはネヴィンズのみではない。一般に最近のアメリカ歴史學界では、獨占的大企業の成長過程をアメリカ社會の進歩の主要推進力として肯定し是認しようとする態度が支配的な傾向となっている。

ハーヴァード大學の企業史教授であり、「企業史學會」

(Business Historical Society) の創立者であるグラス(N. S. B. Gras) は一九四一年の『企業史學會月報』で

「われわれが今日必要とする社會哲學はそのうちに企業を含む哲學である。アメリカ以上に、またロッキングヘラー以上に、效果的にその指導性をもたえた國民や人物は外になかった」

とからたし、また一九四九年の同じ雑誌にも

「冷い戦争の状態で行われており、またさらに激しい形に爆發するおそれがある闘争においては、われわれがとり逃してはならぬ一つの機會が残っている。われわれは、私的企業資本主義を、その競争相手である共産主義に匹敵する一つの宗教にすることがで

(2)
「きる」
と言っている。

ニューヨークの新社會科學學院の歴史哲學講師サヴェス (Edward N. Soveeth) 博士は、「フオーチュン」誌一九五二年四月號において、「企業實踐の弊害は、比較的貧困で廣大な國土において、僅少な資本で、物質的偉業の奇蹟をなしとげた人々のおそろしい努力の副産物であった。」とか「資本主義は成功であった。……歴史家の間にますます廣くうけ入れられねばならないのは、意地の悪い暴露的な非難よりもむしろこのような觀點である、」などとかいている。

また、かつては「季刊マルクス主義者」の創刊者であり、現在はコロムビア大學教養學部長であるルイス・ハッカー (Louis M. Hacker) 教授は、一九五一年九月パリアに開かれた「歴史家による資本主義の取扱ひ方」を主要議題とする國際歴史學會において、「アメリカ歴史學者の反資本主義的偏向」について報告を行い、その中で、ニュー・デイル時代においては「資本主義は停滞的となっており、獨占資本家によって支配されているという

觀念」が一般に行われていたが、ある種の歴史學者はそのような誹謗の繰り返しに對して責任があつたことを指摘するとともに、資本主義は「人類の苦惱を軽減する」のに役立つ體制であつて、もしも歴史家がそれを十分に理解し、その史料をもっと敏感に處理するならば、資本主義を搾取と同一視することは「根本的な訂正」をうけるであろうと主張した⁽³⁾。

これらの歴史家たちの獨占資本に關する觀念はネヴィンスの場合と同じように、すでに制度的に確立されたアメリカ獨占資本主義そのものの觀念的反映に外ならなかつた。全く、現在のアメリカでは、デヴィッド・リレンソール (David E. Lilienthal) の「⁽⁴⁾」
「大企業の中には、基本的商品を生産し分配したり、國家の安全保障を強化したりする能率的な方法以上のものがある。人間の自由を個人主義を促進する一つの社會制度がある。……大企業はこの國の生活そのものの基礎である。」ということがある程度まで事實であるからである。

歴史學者はたとえ過去の出來事を研究の對象とするに

しても、その研究は彼が現在その中に立っている社會的状況の影響から免れることができない。かかれた歴史は、必ずしもすべてが歴史的事實の再現ではなくて、むしろ歴史學者の現代的立場の過去への投影である。ジョン・ディー・ロックフェラーとその事業に關するそれぞれの時代の、それぞれの學者による歴史學的研究は、そのような歴史學の社會性と歴史性をきわめて明瞭に示している。最近ロックフェラーの足跡についての再評價が行われているのも、結局は、獨占資本そのものに對する再評價の歴史學への反映に外ならない。

(1) *Bulletin of the Business Historical Society*, Oct. 1941.

XV, p. 50.

(2) *Bulletin of the Business Historical Society*, March,

1949, XXIII, pp. 63-64.

(3) ハンナー教授の報告は F. A. Hayek, ed., *Capitalism and Historians*, 1954. (University of Chicago Press) に收められている。

(4) David E. Lilienthal. *Big Business: A New Era*, 1953. IX.

(一九五五・三・三一)

〔追記〕 ヘンリー・ロイドについては、カロ・ロイド (Caro Lloyd) の評傳の外、Daniel Aaron, *Men of Good Hope*, 1951. がある。また最近には、オハイオ州立大學のオーコンナー教授 (Harvey O'Connor) が「ロビンソン・ヘンリー」誌第六卷一一號 (一九五五年三月) に「Henry Demarest Lloyd: The Prophetic Tradition.」と題して示唆に富んだ論文を載せている。(四・一九)